

# 佐藤 男郎花（さとう・だんろうか）

## 1、プロフィール

俳人。39歳頃、句作を開始し、加藤楸邨主宰の「寒雷」に投句、誌友を経て準同人。県内では「寂光」に拠り、各新聞社の選者を務める。昭和53年現代俳句協会会員に推される。

<生没>

1908(明治41)年6月1日～1978(昭和53)年11月26日

<代表作>

『句集 男郎花』

小でまりや正しと信じつつかなし

目ざむれば野分病室かけゆけり

<青森との関わり>

青森市長島に生まれる。県内と樺太で新聞記者の後、樺太庁職業紹介所。戦後、県内職業安定所長を歴任、退職。

## 2、作家解説

本名、末蔵。明治41(1908)年6月1日、米穀商の佐藤喜作、はやの7男として、青森市長島83番地に生まれた。同じ俳人、齋藤日出於は甥(姉の子)に当たる。

長島小学校を経て、大正11(1922)年4月、県立青森中学校へ進学。昭和2年3月卒業して、4月から三戸郡階上村登切小学校に代用教員として、1年余り教員生活を送った。

昭和3年10月、弘前新聞社青森支局で新聞記者となり、以降4年8月から東京日日新聞社青森支局、10年同社豊原支局長(旧樺太)。14年2月、記者生活を辞職して、樺太庁職業紹介所職業官補として公職に就き、以降戦後は、昭和42年の退職まで一貫して青森県内の職業安定所に勤務した。

昭和12年5月、境井とめ(明治44年生まれ)と結婚、のち2男3女を設ける。

太平洋戦争後、ソ連占領下で抑留生活。昭和 22 年 4 月、樺太から青森市に引揚げた。昭和 22 年 8 月、八戸公共職業安定所三戸出張所に勤務し、俳句と出会う。八戸職業安定所の俳句グループでの句作から、加藤楸邨主宰「寒雷」に投句し始める。

24 年 12 月、青森公共職業安定所に移る。この頃、高松玉麗を知る。26 年、「寂光」同人となる。

28 年 4 月、三沢公共職業安定所長となり、32 年 8 月、弘前同所長。35 年野辺地同所長。34 年「寒雷」誌友。36 年、次女静子を喪う。「(静子急死)吸入器呼吸止みてなほ寒き音」。

36 年から 39 年 7 月にかけて、「寂光」40 周年記念、青森県歳時記句集の刊行に尽力。

40 年、「寒雷」準同人。42 年、定年退職。53 年、現代俳句協会会員に推される。

昭和 53 年 11 月 26 日、没。享年 70 歳。54 年『句集 男郎花』がすぐり会によって発行。12 月、青森県文化振興会議から、俳句部門での貢献に対し、感謝状が贈られた。

### 3、資料紹介

#### ○『句集 男郎花』

図書

1979(昭和 54)年 11 月 10 日

男郎花の遺句集。とめ夫人の意向を受け、「すぐり句会」同人によって発行された。寒雷入選句全 604 句を上梓したものである。題簽を加藤楸邨、序文工藤汀翠、その他に高松玉麗と下田螢幻子の文章を所収する。なお男郎花は生前は句集刊行を固辞し続けたという。